

---

# 《運命》あります

永坂 暖日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

《運命》あります

### 【Nコード】

N8605M

### 【作者名】

永坂 暖日

### 【あらすじ】

胡散臭げな看板を掲げる店を好奇心からのぞき込んだ若者は、《運命》を売っている、と言う老婆と対面する。

「こっちだって商売さ。不良品は売っていないよ」老婆はそう言って笑った。

## （前書き）

web拍手のお礼用としてしばらく使っていた掌編を修正したものです。自前サイトにあげることなく埋もれさせていたので、この場を借りて公開しています。

ある国のある街で月に一度開かれる市は、今月もにぎわっていた。周辺の村で穫れた新鮮な野菜や果物を売る店、色取り取りの布を売る店、はるか南の国から伝来した珍しい品物を売る店等々。店の数も多ければ、それ以上の数の品物が溢れていた。人の数もまたしかり。幅広なはずの大通りは、屋台のような簡素な店と市にやって来た人々でいっぱいになっていて、人にぶつからずに歩くのは難しいほどだ。

そんな市の中をふらりと歩く、一人の若者がいた。買い物をするうと思っただけではなく、ただ単に、月に一度の賑やかな場の空気を吸い込んで、自分への景気づけにしよう、と思っただけの若者である。金がないから欲しい物があっても買うことができないのだが、それでも、珍しい物を見るだけでそれなりに楽しめる。

買うつもりはないが、一軒一軒をいちいち冷やかしながら楽しんでいたその若者は、とある店先で足を止めた。ほかの店と違って、その店には一人も客が寄りついていないようだった。まるで皆がそこを避けて通っているかのように、店の前にはぼつかりとした空間ができている。

これだけにぎわっている市の中にあつて、何故その店だけ客がいないのか。若者は訝しみ、看板に目を向けた。そして、納得する。粗末な板切れが、やはり粗末な机に立て掛けてあつた。板切れには文字が書いてあるから、きっとそれが店の看板なのだろう。その看板こそ、客が来ない原因に違いなかった。

板切れには、《運命》あります、と書かれていた。  
「にいさん。一つどうだい？」

店のすぐそばで足を止め、看板を見ていた若者を目ざとく見つけて声までかけてきたのは、その店の中にいた老婆だった。彼女が、《運命》を売っているこの店の主らしい。簡素な店の中には、ほか

に誰もいなかった。

無視して通り過ぎようかとも思ったが、珍しい物を見て楽しむため、今日はここへ来ているのだ。売り物が《運命》とは、確かに珍しい。だが、それ以上におもしろい、と興味をそそられた若者は、老婆の招きに応じるように、軒先から店をのぞき込んだ。

造りはほかの店と同じで、軒先に商品を並べるための台を置き、四方に木の柱を立てて天幕が張られている。たったそれだけの簡素な店である。ただ、ほかの店とは違って、台の上にはほとんど物が乗っていないかった。

あるのは、四枚の黒い札だけである。

「ばあさん。もしかしてこの黒い札が、《運命》だって言うのか？」  
若者はからかうような口調で、台の上の札を指さした。

「ああ、そうさね。この札を買えば、札に書いてある運命は、にいいさんのものになる。どうだい。一つ、買ってみないかい？」

老婆は冗談とも本気ともつかない口調で、札の一枚をすつと差し出してきた。

「はは、面白いもんを売ってるじゃないか。だが残念なことに、金がない」

「なに、お代は金じゃあないよ。お代は、にいさん自身の《運命》さ」

そう言つて老婆はにたりと笑った。若者には、笑う老婆の瞳が怪しく光っているように見えた。しかし、それは一瞬のことで、老婆はまたすぐに、愛想の良い笑みを浮かべていた。怪しく見えたのは、気のせいだったのかもしれない、と若者は思った。

「これから先の未来、にいさんが歩むはずの《運命》と引き替えに、この札に書かれている《運命》を手に入れることができるのさ。どうだい、にいさん？　なあに、こつちだつて商売さ。不良品は売っちゃいないよ」

と、老婆は一枚の札を、ヒラヒラと若者の前で振つてみせる。札は表も裏も真っ黒で、そこに何かが書かれているかどうかも分から

なかった。

「今のご時世、いつ戦に巻き込まれないとも知れないじゃないかい？　ただここで《運命》を買えば、もう安心さ。戦に巻き込まれることなく、幸せな人生を送れるよ」

市の中を見渡せば、武器や武具を売っている店も少なくはなかった。いつ戦渦に飲まれるか分からない世情では、自分の身を守るのは自分だけ、というわけである。

若者は、老婆の言うことを頭から信じているわけではない。《運命》のような、目に見えないものを売り買いできるとも思えないし、そもそも、若者は運命の存在そのものを信じていなかった。彼は、剣一本で己の歩む道を切り開いてきた、という自負があった。

それでも、気休めに老婆の売っている《運命》を買ってもいい、と思った。どうせ目に見えないもので、しかも若者自身は存在しないと思っているものだ。ほんのささやかな気休めではあるが、ただならば、買って悔やむこともない。

「おもしろい。一つ、買おう」

若者がそう言うと、老婆は「毎度あり」とにつこり笑い、一枚の白い札を若者に手渡した。

「その白い札を、ここにある好きな黒い札と交換して、売買は終わらせ」

老婆は、台の上に乗っている黒い札を、改めて横一列に並べた。

黒い札は全部で四枚。端の札はなんとなく嫌だったので、選択肢は自然と狭まる。右にするか、左にするか。

若者はわずかに迷い、そして、どうせ気休めならばどれでも同じだと思い直して、右から二枚目、左からは三枚目となる札を選んだ。その黒い札を取り、代わりに、白い札をそこに置く。

「これでいいのか？」

確かめるように老婆を見ると、老婆は満足げに頷いた。若者が置いた白い札を取って一瞥し、何があったのやら、また、にたりと笑う。

「これで、その黒い札に書いてある《運命》は、にいさんのものさ」  
気休めとはいえ、ふと気になって若者は尋ねた。

「どんな《運命》かは、教えてもらえないのか？」

「にいさんが買い取ったとはいえ、先のことなんて知らないほうが  
幸せだろう。なあに、心配することはないよ。商売だからね、不良  
品でないことは保証するさ」

老婆は、はぐらかすようにそう言うだけであつたが、気休めと思  
っているものについてしつこく尋ねるのも馬鹿らしいと思い、若者  
は黒い札を懐にしまった。

人混みに紛れ去っていく若者を見送ると、老婆はもう一度、白い  
札を手にとった。

「不良品じゃあないけどねえ」

にやりと口元を歪め、笑う。先程まで若者に見せていた、愛想の  
良い笑みではなかった。

若者が買った黒い札には、そこそこ幸せな人生が歩める《運命》  
が宿っていた。この先、戦に巻き込まれることはなく、そして可も  
なく不可もない、凡庸な人生を歩む《運命》である。ほかの三枚も  
似たり寄ったりだった。若者が売ってしまった、彼の《運命》と比  
べれば、見劣りするものばかりである。

若者が、黒い札の凡庸な《運命》と引き替えにした、彼の生まれ  
持った《運命》。それは、いずれ起きる大きな戦で武功を立てて英  
雄になる、というものだった。

百戦錬磨、不死身、救国の英雄 様々な呼び名を授けられ、死  
後も永く人々の記憶に留まるはずであつた《運命》を、若者は、ほ  
んの気まぐれで手放してしまったのである。

しかし、英雄となる《運命》を手放すことこそが、若者の本当の  
《運命》だったのか、あるいはねじ曲げられてしまった《運命》だ

ったのか。

「これだから、人間をからかうのはやめられないねえ」

不幸になるわけじゃあないんだし、これくらいはいいじゃないかい　老婆は、まるで誰かに語りかけるように、呟いた。

それから、くつくつと楽しげに笑い、白い札にふつと息を吹きかける。札はたちまち黒い色に変わった。台の上にまた、四枚の黒い札が並ぶ。

「さあさ、『運命』はいらんかね」

月に一度の市で賑わう通りに、老婆の声が飲み込まれる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8605m/>

---

《運命》あります

2010年10月8日13時55分発行